

森有正『アブラハムの生涯』の教育人間学的考察

A Study of *Life of Abraham* Written by Arimasa Mori through the Perspective of Pedagogical Anthropology

辻 直人*¹、熊田 凡子*²、齊藤 英俊*³

要旨

森有正の考える人間の生涯の契機とは、「出発」の原動力としての「内的促し」であり、個人一人一人になり決断する意志を持つことと考えられる。「約束の地」に向かって歩む過程において、人間は経験を深め、且つ変貌させる。そのような行動を伴った一人一人の存在が社会を構成している。この観点から日本の社会や学校を眺めてみれば、個々人の「内的促し」（言葉）を封じ込めてしまう力が集団の中で働いていることを見出すことができる。生涯に亘り「内的促し」によって「出発」していけるような人間を育てる教育こそ、教育人間学的発想である。

キーワード：内的促し (internal inspiration) / 人間形成 (human formation) / 経験論 (experientism) / 言葉 (language)

はじめに (辻)

筆者3名は2016年5月より森有正の講演録『アブラハムの生涯』の講読を進め、その思想の奥深さに現代の教育学・心理学上の課題に対して森有正の思想が有益な示唆を含んでいることを確認してきた。そこで本稿では、『アブラハムの生涯』を教育学、幼児教育学、心理学それぞれの観点から多角的に読み解き、その内容の現代的意義を考察することを目的とする。

森有正の思想はどの作品を読んでもとても深いものであるが、同書で展開されているような人間の一生涯を長期的視野から取り上げた著作は実は少ない。こうした人間の生涯に及ぶ成長過程を見通して教育的課題を探究するという研究視角は、現代において益々重要になっている。何故なら、

子どもを自ら成長していく存在として捉える視点から、人間の形成過程を中心課題とした教育人間学（教育学的人間学）的研究こそが、子ども本来の「生きる力」を大切にすくい取っていく方向性を持っていると考えられるからである。教師（大人）の指導に力点を置いた教授学的教育学は子どもを「型」に嵌めていくことに傾斜しがちであり、近年展開されている日本の教育は益々その傾向を強めているように思われる。私たちは、森有正の思想には、人間の成長を促す教育人間学的視座への有益な観点が含まれており、現代の教育学・心理学の理論と実践をより豊かにする要素が含まれていることを、明らかにしていきたい。

本稿の構成について説明する。幼児教育の立場から熊田が、心理学の立場から齊藤が、教育学の立場から辻がそれぞれに『アブラハムの生涯』の内容分析を試み、現代教育の抱える問題との接点を論じることとする。

1. 作品について (辻)

『アブラハムの生涯』として1980年に日本基督教団出版局より刊行された1冊の講演録は、1970年9月から10月にかけての5回にわたって国際基

*¹ TSUJII, Naoto

北陸学院大学 人間総合学部 子ども教育学科
教育学概論、教育史、教育方法論、道徳教育の研究

*² KUMATA, Namiko

北陸学院大学 人間総合学部 子ども教育学科
保育内容・言葉、保育課程論、乳児保育、幼児理解

*³ SAITO, Hidetoshi

北陸学院大学 人間総合学部 子ども教育学科
教育心理学、発達心理学、幼児理解、人格心理学

督教大学 (ICU) にて行われた連続講演『人間の生涯』を文字起こししたものである。森は1976年に亡くなるので、晩年の講演と位置づけられる。

森有正の経験を軸とした思想体系は、この時既に1つの到達点に達していた。同講演は、旧約聖書創世記11章から25章に登場するアブラハムの生涯を、森の経験論の視点から独自に捉え直した内容になっている。その解釈は、従来の聖書解釈にはとらわれていない。森はアブラハムという人物を、一人の人間の生涯として捉えようとした。それは正に人間学的視野からの考察とも言いえよう。そのような視野は、既存の(狭い意味での)キリスト教という枠を越えて、人間という「普遍的」な存在を根源的に見つめ直す契機を含んでいる。であるから、この講演には、キリスト教の擁護や伝道といった観点は直接的にはない。本人も第1回講演の冒頭で「私が申し上げることは単なるキリスト教の宣伝ではございません」とはっきり述べている。しかし聖書の話である以上、神理解の問題は避けては通れず、森のキリスト教観や神観は話の随所からも読み取れる。ただし、この点については、今回は紙幅の関係で別に検討したい。

そもそもアブラハムはキリスト教だけでなく、ユダヤ教、更にはイスラムにおいても五大預言者の一人として位置付けている。アブラハム自体が、狭い意味での宗教を超えた存在とも捉えられる。森の講演は、そうした一宗教を超えた存在であるアブラハムを人間的に捉えようとし、その生涯から人間として生きる源泉について描こうとした試みとも考えられるだろう。

この5回の講演それぞれの演題は、第1回が「出発」、第2回が「約束の地」すなわち出発して向かっていく方向について、第3回が「モリヤの山」すなわち一人息子のイサクを神に生け贄として献げようとする出来事について、第4回が「死と墓」すなわち生涯の終わりについて、そして第5回が「平和の王」である。このように、アブラハムが神から受けた指示に従って歩み出し、死を迎えるまでの人生の各局面について追って考察している内容となっている。

興味深いことに、その講演原稿が森の死後発行された『森有正記念論文集—経験の水位から—』(新地書房、1980年)に掲載されている。両者の

比較をすると、実際の講演で何処が特に強調されたのかが分かる。

また、先行研究としては広岡義之『森有正におけるキリスト教的人間形成論』(ミネルヴァ書房、2015年)がある。ただしこの著書の主眼はキリスト教教育にあるため、森有正のアブラハム論をキリスト教教育的観点から考察した内容である。本稿は、教育人間学的視野から、森有正のアブラハム論を現代の教育課題に結びつけて考察したい。

以下、筆者それぞれの視点から、森有正『アブラハムの生涯』の具体的考察を展開していくことにする。

2. 「有正会」—森有正『アブラハムの生涯』読書会—の歩み (熊田)

森有正著の読書会(以下「有正会」と表記する)は、2016年5月より、辻直人、齊藤英俊、熊田凡子で開始した。有正会は、各回に報告者を立てるのではなく、3名が集いその場で読み、教育学及び人間学の視点から議論してきた。本稿では、森有正の経験論における「内的促し」と「出発」について、『アブラハムの生涯』(森有正講演集)を通じ各々の立場から分析と考察を重ねてきたことを報告する。

以下、第1回(2016年5月13日)から第23回(2017年7月18日)まで、行われた有正会記録を基に、森有正の研究内容を紹介しよう。

表1に記述したように、筆者らは、『アブラハムの生涯』の読書会を通じて、森有正とアブラハムの生涯を重ね合わせつつ、主に「経験」「内的促し」「出発」について議論してきた。森有正の語りから、筆者(熊田)自身が心打たれ共感することは多い。なぜなら、筆者が生きてきた中には、森有正のような内的促しによる経験、すなわち内側から促された思いや行為があったからである。さらに、乳幼児教育学の立場からも、1人の個人として存在する実存性、また言葉の源となる内的促しにつながる感受性については、森有正の経験論と結びつくものがあると考えられる。

そこで、乳幼児教育学の視点から、乳幼児期の発達過程、特に筆者が担当する授業科目である「保育内容・言葉」における「ことば(こころ)」の根源に着目し、「内的促し」を捉えてみたい。(4.

表1：有正会の歩み

回	年月日	議論内容
1	2016年5月13日	『アブラハムの生涯』「I 出発」(1-17頁)より ・「偶然性によって支配されている」(生まれた瞬間からである) ・「自分を超越する」の議論 絶対的一人称：神と人間の関係 ・「人間の生涯」と「アブラハムの生涯」の普遍性：森有正は経験をつなげて語る。
2	2016年5月20日	『アブラハムの生涯』「I 出発」(17-19頁)より ・「経験」とは、主観性と個別性である。 ・自分の感情が表現され、言葉と経験が結びつく。 ・「言葉」の議論：言葉は残る。文字・語る・時間を超越する・通じ合う・内的感覚・感情と心情と意欲である。
3	2016年5月23日	『アブラハムの生涯』「I 出発」(19-25頁)より ・「経験」とは共感なのか。精神と情念を渦巻いているところが「経験」なのか。 ・主観的な出発：自我を通して一人称となる。森有正的な経験を深めていくと自我を超越する。経験の深まりは死まで続く。
4	2016年5月25日	『アブラハムの生涯』「I 出発」(25-36頁)より ・行先は知らず出発：森有正の出発 出発とは何か、内面的促しによるものか。 ・自らの内面的促しと自分の経験とに忠実に生きる。フランスへ行った森有正の生き方である。 ・内面的に成熟していく過程は人それぞれ：自我の確立(個性化の道) ・森有正の人間の生き方を聖書のアブラハムの生涯に重ねてみる。
5	2016年6月2日	『アブラハムの生涯』「I 出発」(36-40頁)より ・内的促し：真に人間的に深い意味がある。内的促しがあって一人になる。 ・森有正の神は狭い宗教を超えているのではないか。 ・自己実現は完成ではない。(ロジャーズの視点から) ・「促し」「欲求」「傾向」：何かに向かっていく。
6	2016年6月6日	『アブラハムの生涯』「I 出発」(40-46頁)より ・森有正が伝えたかったことは何か：経験は問い直しの継続である。 ・内的促し=信仰 ・信頼は誰かに対し何かを当てにする、信仰は自分から発する自分に基づくもの。 ・出発は孤独からなる。
7	2016年6月13日	『アブラハムの生涯』「II 約束の地」(47-53頁)より ・内面的促しを恐れという言葉に ・森有正は変容、変貌という。 ・内的促しの確認さがあった。 ・危険な時期であっても敢えて、貫く、達成する。
8	2016年6月27日	『アブラハムの生涯』「II 約束の地」(53-58頁)より ・約束の地を信じて ・内面的促しによって決めた以上は責任を持って進む。 ・客観的主観的が重なった時の内的促しである。 ・外側からの基準に合わせず、内側にあるもの、内側を突き動かす主観が、約束の地。
9	2016年7月7日	『アブラハムの生涯』「II 約束の地」(58-61頁)より ・同化するとは吸収すること ・同化は森有正で言えば、二項方式である。 ・二人称の関係は古いものしかない。一人称しか新しいものはない。
10	2016年7月20日	『アブラハムの生涯』「II 約束の地」(62-70頁)より ・森有正の生き方とアブラハムの生涯を重ねてみることができる。 ・学問は人間を超越する ・信仰は主観、実感を通し、経験が伴うものである。
11	2016年7月29日	『アブラハムの生涯』「II 約束の地」(70-77頁)より ・森有正の観点から見たアブラハムは、経験に尽きる。 ・アブラハムの生涯は、経験を深め、豊かにしていくもの。 ・アブラハムは一人称、一人の個人として旅立つのである。
12	2016年8月1日	『アブラハムの生涯』「II 約束の地」(78-83頁)より ・約束の地とは何だったのか。一人一人の人間の内的促しは、主観を通して色々に変貌する。 ・約束の地は普遍的。一人一人の目の前の状況の決断、主観、決心して入る。 ・一人一人の決心、人間の生涯はある目的の地に向かって出発する。 ・出発があり、約束の地へ向かって行く。
13	2016年8月10日	『アブラハムの生涯』「III モリヤの山」(84-96頁)より ・森有正の民主主義理解。自由。神と汝の関係。対話。 ・アブラハムははじめて自分になった。大人となった。年齢ではなく気づきである。 ・一人一人の独立した存在が歩いていく。これが自由の瞬間。内側から出てくる。 ・自発的な出発。実現できないところに向かって出発する。
14	2017年2月1日	『アブラハムの生涯』「III モリヤの山」(87-96頁)より ・アブラハムの生涯のように、神が与えた向かう先、森有正はフランスに行くことであった。そして、その場にいる。 ・出発は自由の瞬間である。自立すること、自分、個を確立することである。

14	2017年2月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のくぐる思考。パリから日本を見る。 ・これまで神に受け身であったが、内的促しによって、自分で選び取った進むべき道を突き詰めるのである。 ・内的促しは神からくる。深い深い経験の真実である。 ・経験によって生きる、絶えず出発する。 ・一人一人が経験に生きる。置かれた状況の中で人間になっていくのである。 ・出発はプロセスではなく瞬間瞬間の存在。向かっていく存在である。
15	2017年2月8日	<p>『アブラハムの生涯』『Ⅲモリヤの山』(96-106頁)より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イサクを捧げるくだり。生きている経験。 ・一つの生涯というものは、その過程を営む生命の稚い日に、すでにその本質において、残るところなく露われているのではないだろうか。(「バビロンの流れのほとりにて」) 悲痛が慰めになる。 ・森有正は、アブラハムを通して、人間を語る、経験を語る。人間の経験の深さを、出来事として捉える。 ・言葉の定義：言葉そのものにその人の人生を含んでいる。 ・森有正が大事にしたいものは、共通感覚である。
16	2017年2月13日	<p>『アブラハムの生涯』『Ⅲモリヤの山』(106-112頁)より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間の本質とは。エリシャ・エリヤは人間の運命、本質的でユニークな瞬間を示す。 ・アブラハムは黙ってイサクを捧げる。このように運命が急迫してくる時、人間の感情が本当に純化する。予期しないこと、運命に接した時に感情が純化される。これが人間の本質的な歩みである、と森有正は語る。 ・森有正の経験論：内的促しの声が私どもにそれを命じる。外から来ること(運命)に対して常に新しくしていく。内側を潜ることである。 ・森有正は、自分の感情ではなく、確信し、運命として自分にパリに生きる。
17	2017年2月20日	<p>『アブラハムの生涯』『Ⅳ死と墓』(113-123頁)より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アブラハムが死に向かっていく場面、常に死を意識させ、人生を示す。 ・自分の死は自分の死である。個に帰る生き方。これまで生きてきた中での死の瞬間。 ・森有正はフランスを肌で感じてきた。
18	2017年3月8日	<p>『アブラハムの生涯』『Ⅳ死と墓』(120-123頁)より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の人生とは何なのか、ヨーロッパ文明には人間を超える普遍性なものがあって、人間は人間になる。「汝自らを知れ」自己を知ること。 ・人間の一生は神の約束に従うことである。 ・モリヤの山以降は、本質的なことが存在の形をとって現れている。
19	2017年3月13日	<p>『アブラハムの生涯』『Ⅳ死と墓』(129-139頁)より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森有正の経験を通して、1つの国の人と他の国の人とが触れ合うことは難しい。 ・森有正は寄留者として住み、洞察していた。 ・アブラハムから見た土地の人は、透明に見える。 ・霊と肉：神との応答、人間との応答を結びつけ支えるのが責任である。
20	2017年6月9日	<p>『アブラハムの生涯』『Ⅴ平和の王』(140-150頁)より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神がアブラハムの前に現れた。霊が働く。聖霊降臨。アブラハムの全生涯を貫いて彼を心の底から内面的に導いていた神様がここで姿を現わされた。 ・内なる声は神との結びつきの中で気づかされる。内側から働く聖霊なる神。 ・内的促しは神との対話で、自分に忠実に、経験に忠実に生きることである。 ・霊とこの世との間に立つことを選んだ。神からの使命を選んだ。一貫してこの内面的促しがあった。 ・人生が問いかけてくる。応える意味が責任。(ビクトール・フランクルの自己実現。)
21	2017年7月3日	<p>『アブラハムの生涯』『Ⅴ平和の王』(151-156頁)より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森有正の価値：信仰は冒険である。 ・生かされている意味：ひどい目にあっても神を信じる意志。救いを信じる。 ・アブラハムの暮：天の故郷に向かって歩む生活。 ・神様は自分たちの先に居て希みをつかまえようとする。永遠的な生活。 ・経験(論)、成熟、変貌：絶えず新しくなっている→出来事→外側の環境の相互作用。ジェンドリンのフォーカシング。 ・内的促し→確信→出発
22	2017年7月11日	<p>『アブラハムの生涯』『Ⅴ平和の王』(156-160頁)より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2つの大切なこと：1つは自分の内的促し。1つは確信をもって働きながら待つ。 ・何かが決まる時、時満ちて。 ・人間の生涯は、その人だけでは完結しない。一個人の経験ではなく、それが繋がって後が続く、神の約束のように、星の数のようにして続く。自分の何百年後が繋がっているとは想像できない。 ・過去があって、確信があって、推測につながる。意志を持って、確信を持っている。それが信仰である。
23	2017年7月18日	<p>『アブラハムの生涯』『Ⅴ平和の王』(160-167頁)(解題169-172頁)より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1つは内的促し、羅針盤、不可知なもの。完全な充実ではない。満ち足りない。 ・もう1つは完結した生涯 ・ドキュメントではなく、モニュメントとして、残されたそのものが過去の歴史。 ・一人一人自身の道を歩まなければならない。 ・一人一人意志を持って決断していく。生き方に責任をもって。 ・一人一人対等、唯一、違うことを認め合う。自分になる。

表1「議論内容」は、熊田凡子が記録(有正会23回までの研究ノート)した内容を基にまとめたものである。

乳幼児期の育ちと「内的促し」で、後述する。）

3. 教育人間学的課題としての「出発」の意義(辻)

本節では、『アブラハムの生涯』で語られている森有正の「人間の生涯」をめぐる思想の内容を整理してその構造を明らかにすると共に、その思想が教育人間学的観点にとってどのような意義があるのか、現代教育実践にどのような示唆を与えうるのか、考察していく。

森は、第1回講演の冒頭で「一人一人が持っている人間の生涯を構成している本質的な契機について」述べたいと語っている。では、その契機とは何か。森の考える生涯の契機、生きていく過程で人間が人間となっていくための契機として、いくつかのキーワードを指摘できる。中でも「出発」を中心に、「内的促し」「一人（の人間になるということ）」「責任」そして「経験」という概念が重要と考えられる。と言うのも、これらのキーワードはいずれも、多少の言い回しの変化はあるが、話の中で頻出しており、森が強調しようとしていることが本文から読み取れるからである。そこでここでは「出発」という概念を軸として、森思想の構造を明らかにしてみたい。その上で、その思想の教育人間学的意義を論じたい。

(以下、原文の提示は、そのまま引用し、頁番号を示した。)

3-1. 「出発」について

森有正は講演の中で、アブラハムを「出発」した人と述べている(26頁)。また、「結局彼の一生全体が出発だった」(39頁)とも、「出発の人で終わってしまっ」たとも述べている(40頁)。目的地には到着しなかったけれども、ある方向へ向かって「出発」した人として、森はアブラハムを評価しているのである。

旧約聖書の記述に従えば、アブラハムに対して最初に、主なる神からの語りかけがあった。すなわち「あなたは生まれ故郷、父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい」と呼ばれたのであった(創世記12:1)。それに対し「アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた」(創世記12:4)と、書かれている。そして「信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て

行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らずに、出て行きました」(ヘブル11:8)、すなわち行き先も分からぬまま、神の呼びかけに従って「目的地(講演の中で森は「約束の地」と呼んでいる)」に向けて出発した。そして結局「約束のものを手に入れることはありませんでした」(ヘブル11:13)。つまり森は、最終目標を達することは二の次であって、「出発」すること自体を重視しているのである。

このようなアブラハム物語を受けて、森は「私どもは自分の経験を本当に自分で持ってただけでいておいていただけではダメなので、私ども自身も出発しなければならない」(34頁)と訴える。

この場合、出発と言っても、単に物理的に何処かへ向かって移動を始めたという意味だけではない。ここでは、ある意志を持って行動すること、新しい生き方に向かって心を決めて進み出すことを含意しており、人間の内面の問題であった。それは、「アブラハムの出発は、結局本当の内的世界への、人間への、自由への出発だった」(39頁)という発言からも分かる。また第1回の講演タイトルとしても用いられていることから、「出発」がアブラハム及び全ての人間の生涯において重要な契機と森が捉えていることは明らかである。では、どうして、全ての人が「出発」しなければならないのだろうか。「出発」は、どのような時に起こるのだろうか。

3-2. 「内的促し」について

「出発」がどのように始まるかと言えば、個々人の「内的促し」による。この「内的促し」という概念は、講演の中では「内面的促し」「内心の促し」などいくつかの言い回しを用いて語られており、非常に使用頻度が高く、森有正の思想を理解する上で重要な概念である。

森は、新しい経験の端緒になるものを「内面的促し」と呼んでいる(35~36頁)。「内心の促し」は「本来人生のいかなる時期にも、人間が人間として生きる限り、必ず起こり得るもの」(49頁)とも述べている。そして森有正は、アブラハムの出発は「内的促し」であることを強調する。「この不思議な人物は、自らの内面的促しと自分の経験とに忠実に生き」た、と(26頁)。

アブラハムは、キリスト教会ではよく「信仰の父」と呼ばれている。つまり、キリスト教会においてはアブラハムのことを主なる神に忠実に従った模範的信仰者と受け取ることが多い。しかし、森は神に向き合う根本姿勢を問題にしている。すなわち、どうすることが神に従うことなのか、という問題である。アブラハムはただ闇雲に盲目的に神に従ったのではなく、はっきりとした意志と決断を持って従った、と。それこそが、アブラハムの「内的促し」であった。このようにより深く内面の動きに焦点をあてて、その人物を解釈していると言えよう。この点について、森は次のように語っている。

アブラハムのこういう内的な促しを外から支えてくれるものは何もありませんでした。創世記ではこの孤独な出発は、深い宗教的な意味を持たされています。しかし私は単にそこに宗教的な意味を読み取るだけではなくて、本当に深い人間の姿を読み取ることができるのではないだろうか、と考えます。(38頁)

「内的促し」を外から支えてくれるものは何もない、それは孤独な出発だったと述べている。この意味については後でもう少し考えてみたいが、ここでも語っているように、森はアブラハムの考察を通じて、深い人間の生きる姿を見出そうとしていた。

「内的促し」は「一時の錯覚に過ぎないこと」もあるし、また、「現に置かれている境遇と矛盾するものであることが多い」とさえ森は述べている¹⁾。しかし、「豊かな経験を結ぶようなものであることもある」(50頁)。更に「人生は冒険、荒海に乗り出す航海のようなもの(中略)たった一つの羅針盤、あるいは羅針盤らしいものは、自分が内的に促しであると感ずることと、またそれを貫こうとする意志だけ」(155～156頁)とも言う。人は、自分の「内的促し」を羅針盤と信じて行動していくしかない。

「一つの内的促しの一つの経験を作り上げていった例」として、神学者であったシュヴァイツァー(Albert Schweitzer, 1875-1965)が医学を学んでアフリカに渡る例を紹介している(51～52

頁)。アブラハムも、正に「内的促し」に従った事例と捉えた。「アブラハムはその内的な促しから始まり、静かな死に至るまでのその生涯の間、いつも自分を内側から動かすものを感じ、それを信じ通した(中略)つまり自分の羅針盤に頼り抜いた(中略)その羅針盤に頼る以外に何もすることができない。(中略)それは言葉を換えて言えば、忍耐ということです。この忍耐というのは、要するに私どもが働きながら待つということです」(156～157頁)。死の瞬間まで「内的促し」に従って生きた、だからこそ、アブラハムにとって「一生全体が出発だった」と言えるのである。

先ほど、アブラハムの出発は「内的促し」によると述べたが、その促しは神との対話から出てきた。そのことを森は、「神の召命としか名付けられないような一つの事件」「神の召しとしか名付けられない事件が起こった」(35頁)と語っている。アブラハムにとって、「神」と言わざるを得ない存在との対話から、出発は促された。

だから、アブラハムは決してでたらめに出発したわけではない(53頁)。「自分は今、現にこの時に、自分の生涯のこの時期に、こういうことをやっていたいのだろうかということが必ず起こってきます」(54頁)。正に、衝動性ではなく必然性と確信を伴った「出発」だったのだ。

3-3. 「一人(の人間になるということ)」

森は、「本当の人間が出発する時にはどうしても一人で出発しなければならない」とも述べている(39頁)。一人(個人)にならなければ、出発できない。本文において、「一人」という言葉も極めて頻繁に登場する。

そもそも、「人間においてはすべてのことは主観性を通して起こってくる」(17頁)もので、人間は一人一人が自分の世界を持っている。

たとえ自分がどんなに微小なものであっても、どんなにほかの条件に制約されたものであっても、自分の主観性というものを通らなければ、人間である私の中に何ものも入ってくることができない。こういう、私どもが生きる世界、一人一人が持っている世界、それを私は「経験」という名前を持って呼んでおります。(17～18

頁)

つまり、個人になることが、森有正の経験論においては決定的に重要になってくる。よく森有正の著作に、「一人称」になる、という話が出てくる²。また、日本には一人称としての「私」がない、ということもある講演の中で指摘している³。通常、誰かの相手になっている関係の時に、「私」と「あなた」は二人称同士の関係になる。二人称の関係を離れば「私」は一人称として存在するが、日本では常に「私」が誰かの「あなた」でいること（「二人称」でいること）を美德とするので、一人称が存在しないというのである。この議論については突飛な印象を受ける一方で、核心を突いている議論ではなかろうか。

さて、信仰における神との関係は通常二人称の関係となる。何故なら、神は祈りを語る相手であり、時に神が語りかけてくるからである。アブラハムにとっても「汝と呼ばれる神」(89頁)と対峙していた。しかし、一方で絶対的な神と人間との関係において、人間は二人称を保ちながら一人称にもなりうる、と森は指摘する⁴。神との対話により自己を見つめる、素の個人になる、ここに森有正の信仰を読み取ることができないだろうか。「孤独」「個人」「自分」といった一人であること、一人になることの意味を、森有正は渡仏以来の思索で見出していった。孤独は渡仏後最初の著作である『バビロンの流れのほとりにて』(1957年)以来森がヨーロッパで思索してきた項目の一つであったし、「霧の朝」(『遙かなノートル・ダム』所収、1967年)でも、パリの人たちは「自分をさがしている」と述べている。つまり、森は徹底的に個人を経由する思想家だったと言えるだろう。実際に一人でパリに残り思索を続け、己に厳しい姿勢を持った思想家であったという一面は、以下の文章からも伝わってくる。

私どもはそういう細かい日常の生活の中で、一つの促しに動かされてある目的を与えられ、それによって自分の生活を組織します。(中略)(親族など)を全部断ち切って、本当に自分の中に自分の経験と促しと、そしてその目的と、そのものために生きてゆく時に、人間は全く一人

の新しい人間になる。(中略)一人一人が本質においてはアブラハムと同じような生活を送ることができるのではないだろうか、と私は考えております。(76～77頁)

一人になり「出発」するには、その人に物事を判断し決断することが必要であり、その行動には責任が伴う。「アブラハムは感覚ではなくて、意志を選んだ」(149頁)。しかし、「内的促し」による「出発」は、それだけ強い意志と決断によって自らの人生の歩みを選び取っていくことに他ならない。経験の深まりとは、そうした個人的なものである。「経験というものが一人の人間というものを正しく定義する」(92頁)。ただ、そうした一人の個人的な経験が社会を構成する成員となっていく。「本当の社会というものは、こういう意味で大人になった、すなわち自分の目標、自分の仕事、あるいは自分と隣人との関係、自分と家族との関係、あるいは自分と何であっても自分の目指すところのものと契約関係に入った大人が、相互にかけがえのない成員として形成するところのものである」(92～93頁)と述べているように、森は社会を構成するのは独立した一人一人である、と考えていた。

以上見てきたように、森有正の考える人間の生涯は、「出発」することから新たに始まる。「出発」は内的促しが契機となり、一人一人の意志によって決断される。生涯が終わるまで経験の深まりや変貌によって、絶えず人間は「出発」しなければならない、というのが『アブラハムの生涯』で展開された森の思想であった。

3-4. 日本文明・社会・学校教育の特徴

ここまで森有正『アブラハムの生涯』で展開されている思想を、「出発」という概念を軸に整理してきた。本節の最後に、森の観点から見た日本社会及び学校について考察し、森有正思想の意義について考えてみたい。

同講演録の中で、森は日本文明とヨーロッパ文明の特徴を2度繰り返している(43頁、59頁)。日本は「アシミレーション(assimilation)の文明」すなわち「同化の文明」で、ヨーロッパは「アヴァ

ンテュール (aventure)」の文明すなわち「冒険の文明」である。日本は外国の文明を自国に取り入れることを得意とし、他文明を吸収同化させることで日本文明を築き上げてきた。しかし「無の中に何かを求めて出ていくという冒険の思想というものは日本の文明には根本的に欠けております」(43頁)、あるいは「日本人は自分のほうから出発して、他の中に入り込み、そこで自分の新しい世界、新しい自分というものを築き上げるという力は非常に劣っているように思います」(59頁)と指摘している。つまり日本の場合、出発を阻む社会と見ていた。しかし、人間は新たな地へ向かって出発(冒険)しなければならない。

日本社会、中でも日本の学校は個性よりも同調同化傾向を強めて集団行動を重視する特徴が顕著になってきている。学級目標でも、「下級生のお手本になろう」とか「相手のことを気遣って話そう」など、そのことを掲げる場合が多い。確かに、「気遣う」ことは悪いことではない。しかし、常に周囲の様子を気にして、思うように発言できない雰囲気を作っているとしたら、それは問題と言わざるを得ない。そうした場面では、子どもたち個々の思いや考えは押さえ込まれてしまうからである。日本の学校を中心とした教育が如何にそのような一人一人の成長する場面をふさぐ傾向が強いか。「手本」になる行動や決まりをしっかり守れることは、表面上は素晴らしく見える。しかし、「型」に合わせるものが先に来て、森有正の言うところの「出発」を促さない、内的促しを押さえ込む力が働きがちになる。

佐藤学はアジアの授業を「模倣的様式」と呼び、欧米型の授業を「変容的様式」と指摘している⁵⁾。既にお手本や型を「模倣」するのは、アジアの教育に伝統として根付いてしまっている。その実態を根底から作り直すことは至難の業と言わざるを得ない。しかし、実際は多くの子どもたちが様々な感情を心に押し込めていることで、様々なひずみが生じているのも確かである⁶⁾。主体性を伸ばす、個性の尊重、と言われるような教育目標は個々の「内なる声」を大事にすることから始まると考えられる⁷⁾。それは単に自分の感情や思考を吐露させることでも、おしゃべりにさせることでもない。常に、自分を見つめ絶えず新しくなっていく

こと、すなわち「新しい人」になる教育こそが日本の教育において欠けているのである。

「新しくなる」ということ、それは森の思索における1つの大きなテーマである。森は一人称の世界には基本的に「新しい」ことしかない、と述べている⁸⁾。一方で、二人称の世界には「古い」ものしかない。日本の場合、先にも触れた通り、二人称関係を美德とする傾向が強い。だからこそ、相手を気遣った話し方がよしとされるし、そもそも「おもてなし」の文化は、相手への気遣いから始まったものに他ならない。それだけ、日本人の思考を根底から規定してしまっている根深い問題である。しかし、「全く一人の新しい人間になる」(77頁)ことを目指すことで、現代社会はより根本的に民主的で共存できる社会になっていくのではないか。

森有正は人間の生涯を、経験を土台として内的促しにより、新しい方向(「約束の地」)へと「出発」するという過程として描いている。生涯における「出発」の重要性。それを後押しする内的促し。出発の向かう約束の地。その歩みを進める上での責任を確認することができた。このような視点から人間の成長や日本の教育を捉え直すことで、今の日本の学校教育や社会が抱える問題を改善する方向性を見出すことを期待したい。

本稿では宗教的考察や、人生の予期せぬ出来事について(第3回講演「モリヤの山」の主題)、あるいは死について(第4回「死と墓」の主題)は十分に考察できなかった。今後の課題である。

4. 乳幼児期の育ち「内的促し」—「言葉」(熊田)

4-1. 乳幼児の最初の出発—「偶然性」

乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる重要な時期であることは、言うまでもない。最初に人間は、乳呑み児として、自ら母親の乳房に触れ吸い付くことができ、最初の快の経験—安心—を得る。この乳児期の最初の営みは、乳幼児教育における発達観点では、乳児(新生児)の行為、いわゆる原始反射的な運動として解釈される。しかし、乳児にとっては、母親の乳房に触れる瞬間も乳房に吸い付く瞬間も、全て偶然的に生まれたもので、乳児自らが快と感じ取る感受性によって成立する出来事なのである⁹⁾。感受性その

ものが、後の言葉となる根源である。

つまり、人間は生まれた瞬間から「偶然性」の中で、諸感覚を通して自ら内側で感じる「出発」が起っているのである。森有正で言えば、「出発」は「内的促し」によるものである。森有正が言うように「私どもの各瞬間が偶然性によって支配されている」（16頁）ということ、乳幼児教育の原理的意味からも理解することができる。特に、この「偶然性」については、人間のできる意図的営みを越えた神の御業である、と筆者は受け止めている。

乳児期の偶然性による経験はその後も続き、吸う、飲む、噛む、味わう、匂う、触る、舐める、握る、見る、聞く、というように全身の感覚を通して、重ねられていく。これが、言語となって現れる以前の応答である。このように、全感覚を通じた経験が繰り返されていくのである。

次に、乳幼児期の身体感覚を伴った経験による育ちを、森有正の視点で確認したい。

4-2. 内的感覚を伴う「経験」—「主観性」

私たち人間は、生後間もない時から身体感覚を伴う多様な経験が積み重なることにより、感性、好奇心、探究心や思考力が養われる。これが、私たち人間が生きていく上での基礎となる¹⁰。

前述したように、まずは、子どもは乳児期から感覚を通じた経験によって、快あるいは不快を自ら感じ取る。これらの感受性による応答が、森有正で言えば、乳児期の一人の個としての出発である。それが、次第に、泣く、手を伸ばす、口に入れて舐める等の探究・思考の行為や表現として、外界に示していくようになる。特に、身体感覚を伴った自らの欲求が現われてくる。これは、身体感覚によって内側で感受し、内側から感覚を通して応答する、心と身体の一體的な動きである。つまり、これが内的感覚を伴う「内的促し」である。それが、大人の働きかけによって、次第に言葉に結びついて行く。すなわち、繰り返しの試しを行いながら、自己へ内在化していくのである。

これらの一連の過程は、乳幼児期の子どもの自発的応答（欲求）によって起こる。感受性と主観性が連動しながら現われてくる。森有正が「人間においてはすべてのことは主観性を通して起って

くる」「人間は一人一人が自分の世界を持っている」（17頁）と述べているが、このように乳幼児期の子どもを主観的存在として価値を置くならば、子どもの内側で起こる「内的促し」に寄り添うことの重要さや、その後の関わり方の捉え方をより意味深く考えることができるのではないか。

このような過程については、既に、子どもの内面を洞察し感覚教育の実践を展開した幼児教育思想家マリア・モンテッソーリ（Maria Montessori, 1870-1952）が、乳児期から自ら内側で感じ取る秩序感とそれに伴った内的欲求による外側への現れを内的過程として捉えている¹¹。また、同様に幼稚園の創始者、幼児教育の理論的建設者として名高いフリードリッヒ・フレーベル（Freidrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852）も、子どもは生まれると同時に自由に全面的に主体が育まれるべきであって、乳幼児期は感覚器官によって自発的内面化していくと理解している¹²。さらに森有正は、私たち人間は最初から内なる感覚を通じた促しによる主観的存在、一人の個であることを示している。

このようにモンテッソーリやフレーベルという、いわゆる幼児教育思想の先駆者らの見解が、森有正によるアブラハムと森自身の生涯を通じた人間の本質的に捉える視座からも言及されている。人間が真に主観性を通じた営みによって成長が促されるのか、森思想から新たに示唆を得ることができる。

4-3. 乳幼児の「言葉」の源となる「内的促し」

今日の教育・保育では、子ども自らの内側の世界で促され育とうとしていることを顧みず、何かが「できる」「できない」という表面的な判断に捉われたり、周囲に合わせたり、関わる大人の価値観に共感する（させる）、意図（方向）付けることに捉われたりし過ぎていることが指摘できる。

さらに、次年度、平成30年度には学習指導要領改訂に通底するように、同時に幼稚園教育要領及び保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂され、特に、乳幼児期の育ちの先を見据えた幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として、次の10項目としてあげられている。「①健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性・

規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量・図形、文字等への関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現¹³。このような、乳幼児の育ちを児童期につなげて捉える視点は重要であり、今後の保育・教育に期待される。

しかし一方で、本質的に子どもの育つことの根源である子どもの内側にある心の動き、すなわち言葉の源となる「内的促し」と、それを受けとめ応答する営みが大事にされているのかどうか。ここに、教育人間学的見方の必要性を森有正から新たに示されたと言える。

つまり、森思想が示す人間(子ども)の生涯(育ち)の視野で言えば、内側の感覚を伴った働き、すなわち主観性を通した内的促しによって起こる出発—経験—が繰り返されることで、乳幼児の快活な育ちが伸展する。

このように、人間は幼い頃から内側の促しによる思考や願望、予感等から起こる出来事や行為を通して経験を深めていく。このような乳幼児期から内心の促しは誰にでも起こることである。森有正は、アブラハムの生涯を通じて、内的促しは、「本来人生のいかなる時期にも、人間が人間として生きている限り、必ず起こり得るものである」(49頁)と言う。

つまり、私たち人間は、生涯において、すでに乳幼児期から、目に見えるもの及び見えないものに出会い、内側で感じ取り、言葉となる意味付けを繰り返し応答する経験を重ねているのである。もちろん、キリスト教教育の立場で言うならば、乳幼児期から神に出会い、それによる内的促しが起っているのである。これについては次回の課題としたい。

本節では、乳幼児教育学の視点から、内的促しは乳幼児の育ち、特に言葉の源を支えるものであることを、森有正の教育人間学的見方から確認できた。

5. 人の経験に関する一考察(齊藤)

森有正の『アブラハムの生涯』を勉強会で講読していく中で、アブラハムの生涯を通して、人の生涯の中での人の経験について学び、考えてきた。

その中で、森が考える人の生涯における「人の

経験」のとらえ方について、心理学者であり、「フォーカシング」という心理療法のアプローチを提唱したユージン・ジェンドリン(Eugene T. Gendlin, 1926-2017)の人の経験のとらえ方と共通する点がかなりあると感じられた。

そこで、本節においては、「人の経験」について森有正とジェンドリンの理論の比較検討を通して、考察する。また、森の経験論が、いじめ被害経験といったネガティブな経験においてその経験がどう変化していくかといった心理学的課題にどのように活用することができるかを検討する。

5-1. 人の経験に関する森有正の理論とジェンドリンの理論の比較検討

森有正は、人の経験を「体験」と「経験」の2つに分けている。森によれば、「経験が体験と違うのは、そしてそれについての一つのもっとも根本的な点は、前者が絶対的に人為的に、あるいは計画的に、作り出すことのできない、ということである。体験を積み、さらにそれを豊かにすることは出来る。しかしそう思うことは、すでにその人の経験の上に立ってのことであり、その経験そのものは、断じてそういう予見的思考ないしは計算的実現を許さないものである。体験は心がけによって豊かになるであろう。(中略)経験は、ただ変容をとげるだけである¹⁴」と述べているように、森が考える「経験」は、人為的に計画的に作り出すことのできないものであり、変容を伴うものと考えられる。

人の経験についてジェンドリンは「体験(experience)」と「体験過程(experiencing)」の2つの視点から捉えようとする¹⁵。

ジェンドリンは、人は常に対人関係など外界(環境)との相互作用の中で自分の内面でまだ言葉になる以前に感じられる経験をしていることを指摘し、その経験の流れを体験過程(experiencing)と名づけた。体験過程は常に現在進行形であり、私たちの中で経験は変化していくものと考えられる。

他方で、「体験」の状態は、ある体験が1つの「体験」として概念化された状態にあると考える。そのため「体験」の心理的状态では、概念化、言語化された思考の状態であると考えられ、「体験」状態では、思考や体験が固定化し変化が起こりに

くく、そのため精神的に不安定な状態につながると考えられる。

一方で、精神的に健康な状態では、人は体験過程が促進されている状態にあり、新たな自分の側面への気づきや人格的な成熟といった心理的な変化が起こっていくときには、体験過程が進展していると考え、体験過程の促進を重要視した。そのため、心理療法におけるフォーカシングの1つの目的は、体験過程が促進されることにあると考える。

このジェンドリンの体験過程のとらえ方は、森のいう「経験」に重なる点が多いと思われる。

森は『アブラハムの生涯』において人の経験について「私どもが生きる世界、一人一人が持っている世界、それを私は「経験」という名前を持って呼んでおりますが、私どもの認識、判断、意欲、感情、それのみならず、さらに対象となるすべてのものは、この私ども一人一人が持っている経験内での出来事なのです。どんなに客観的に見えるものでも、この経験における客観性なのです」(18頁)といい、一人一人が固有の世界をもち、認識や感情といった心理的な側面も一人一人の経験内での出来事だと述べる。この点は、ジェンドリンの理論からすると、外界との相互作用から生まれる一人一人の個人の内面で感じられる経験の流れを重要視する体験過程の概念と重なるところである。

また、「経験というものは単に私どもの心の鏡に大体が映るという静的なものではなくて、ひとつの成熟を遂げるもの」(19頁)とも述べている。この点は、体験過程の進展が新たな自己への気づきや人格の成熟につながると考えている点と重なる。

さらに、体験過程の考えでは、体験に一定の方向性をもったプロセスがあるわけではなく、常に人間は新たな気づきを感じていることを強調するが、これは森のいう「内的促し」ともつながるように思われる。どちらの考えも経験にあらかじめ一定の方向性があるわけではなく、経験の過程は一人ひとり固有のものであると考える点が共通している。以上のように、森とジェンドリンの人の経験に対するとらえ方には共通する点があり、考えられる。

この共通点は、人の経験そのものを考える上でも重要だと思われる。私たちが何かを経験することとは、一定のプロセスの中にあるわけではなく、自分と外界との相互作用の中で、言葉になる以前の自分の内面で感じている経験の流れに触れていく中で、自分の内側から起こるものと考えられる。そして、その経験は新たな気づきや人格の成熟や変容といったものを起こすものであり、一人ひとりにとって固有のものであると考えられる。

このように、森の経験論は、ジェンドリンの考えと共通するところがあり、人の経験を考える上で重要な視点を与えてくれると思われる。

5-2. いじめ被害経験からの自己の成長感との関連性から

森の経験論から、いじめ被害経験といったネガティブな経験、出来事について考えてみたい。

いじめ被害経験について、森やジェンドリンの経験論からすると、いじめ被害経験がその後マイナスの影響を強く与えず、自己の成長感につながるためには、いじめ被害経験に対する同じ思考や感情が堂々巡りになり、いじめ被害経験が固定化されてしまう「体験」の状態にならないようにすることが重要になってくると考えられる。

いじめ被害経験から自己の成長を感じている人は、いじめ被害経験に対する対処行動としていじめ被害経験を自分の中で捉え直す認知的再評価や自分自身を変えていこうと努力する自己変容の努力といったことを行っていること¹⁶が示されている。

これらの対処行動は、いじめ被害経験が「体験」から「経験や体験過程」へと変化していくことにつながる対処行動と考えられるが、そのような対処行動をとれるようになった心理的背景には、いじめ被害経験に固定化されず、今自分の感じている経験の流れに触れていることが関係していることが考えられる。そして、経験の状態により、いじめ被害経験自体の意味づけが変化し、客観的に捉え直したり、新たな意味づけが起こったのだと思われる。

その一方で、いじめ被害経験は PTSD にもつながる場合もあり¹⁷、周囲の適切なサポートも重要である。例えば、いじめ被害後に新たな友だちが

できることが自己の成長感につながることもあり¹⁸、周囲の適切なサポートも、いじめ被害経験を「体験」の状態ではなく、「経験」の状態につながっていく上で重要である。そのためにはどのようなサポートが経験や体験過程を促進させるかの検討が必要であるが、その点は今後の課題としたい。

いじめ被害経験というネガティブな経験を、森やジェンドリンの理論を通して見てきたが、いじめ被害経験はネガティブな経験であるが、そのことが自己の成長感につながっていくことを考えていく上で、森やジェンドリンの考える「体験」の状態に留まるのではなく、「経験・体験過程」の促進につながっていくかが重要だと思われる。

5-3. おわりに

このように、今回『アブラハムの生涯』の講読を通して学んだ森の経験論は、ジェンドリンなどの心理学者の考える経験論とも共通点があることがわかった。

また、森の経験論は、いじめ被害経験といったネガティブな経験をどう経験し、どのように経験していけばいいかといった心理学的な課題においても重要な視点を与えてくれると考えられる。

今後は、森の文献を通し、人の生涯における自己実現など人の成長と「内的促し」といった森が重要視した考えとの検討やさらに森理論とジェンドリンの理論から人の経験の特徴について検討していきたい。

総括(辻)

筆者3名により、それぞれ教育学、乳幼児教育学、心理学の立場から森有正『アブラハムの生涯』の考察を行った。共通して分かったことは、森有正の経験論や出発を軸とした内的促し論は、教育学や心理学の先行研究にも通じる内容を有しているということであった。乳幼児教育学においてはフレーベルやモンテッソーリが述べてきた身体感覚や偶然性の指摘が、森のいうところの「経験」や「内的促し」に重なるという点である。この「内的促し」を育むことが、成長と共に子どもの内側に言葉を育てることの源となっていく。また、心理学においても、ジェンドリンの「体験」と「体

験過程」という捉え方も、森有正の「体験」と「経験」に共通することが分かった。このように、森有正の思想は広く学問領域を超えて共通の基礎となりうる普遍性を持っていると言える。

森有正の考える人間の生涯の契機とは、「出発」の原動力としての「内的促し」であり、個人一人一人になり決断する意志を持つことと考えられる。「約束の地」に向かって歩む過程において、人間は経験を深め、且つ変貌させる。そのような行動を伴った一人一人の存在が社会を構成している。この観点から日本の社会や学校を眺めてみれば、個々人の「内的促し」を封じ込めてしまう力が集団の中で働いていることを見出すことができる。生涯に渡り「内的促し」によって「出発」していけるような人間を育てる教育こそ、教育人間学的発想と言える。森有正の思想は教育人間学としても重要な視点を含んでいる。

今後も引き続き共同研究や個々の研究を通じて、森有正の思想を視野に入れながら、現代における教育課題を掘り下げる考察を進めていきたい。

〈註〉

¹ この部分の語りについては、森有正自身が自らの人生を重ねて語っているとも受け取れる。すなわち、1950年に戦後最初のフランス政府給費留学生として渡仏した後、1年の期限を過ぎても日本に帰らず、日本での生活や地位全てを投げ打って一人バリーで思索に没頭した生き方は、正に「内的促し」に従ったということではなかろうか。しかし、このような解釈はあくまでも推測に過ぎないが、講演の中で、異国の地で一外国人として暮らしていたアブラハムと自分自身を重ねている場面があることは指摘しておきたい。(『アブラハムの生涯』126～128頁)

² 森有正「古いものと新しいもの」『古いものと新しいもの』日本基督教団出版局、1975年、139頁以降参照。

³ 森有正「経験について」『古いものと新しいもの』30頁以降参照。

⁴ 森有正「古いものと新しいもの」153頁。

⁵ 佐藤学『教育の方法』左右社、2010年、49頁。

⁶ 子どもが自分の気持ちを押し殺している実態については、金森俊朗・辻直人『学び合う教室 金森学級と日本の世界教育遺産』(角川新書、2017年)第1章、第2章などで詳述している。

- ⁷ 「内なる声」については、金森・辻共著第6章を参照。
- ⁸ 森有正「古いものと新しいもの」146頁。
- ⁹ 熊田凡子「乳幼児期における『触れる』育ちについて—マリア・モンテッソーリの感覚の観点から—」（『教職課程研究』第3号、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部、2017年3月）では、新生児は生後間もなく精神（こころ）の生活が始まっており、内側で心地よいと感じる秩序を敏感にしていく重要性を確認した。
- ¹⁰ 子どもは生まれながらに備わっている諸感覚を働かせながら、身の回りの環境に自発的に働きかけていく。五感など身体感覚を伴う直接的な経験が大切である。（厚生労働省『保育所保育指針解説書』「第2章子どもの発達」フレーベル館、2008年、32-54頁を参照。）
- ¹¹ マリア・モンテッソーリの「自発性」の捉え方について以下参照。
マリア・モンテッソーリ、鼓常良訳『幼児の秘密』国土社、1968年、65-76頁。
マリア・モンテッソーリ、鼓常良訳『子どもの心 吸収する心』国土社、1971年、33-37頁。
マリア・モンテッソーリ、坂本堯訳『人間の形成について』エンデルレ書店、1970年、88頁。
- ¹² フレーベル、岩崎次男訳『世界教育学選集 人間の教育1』明治図書、1960年、26-44頁。フレーベル、岩崎次男訳『梅根悟・勝田守一監修 世界教育学選集 幼児教育論』「幼児、あるいは最初の子どもの行動の重要性」（Das kleine Kind oder die Bedeutsamkeit des allerersten Kindestuns, 1826.）明治図書、1972年、42-56頁。
- ¹³ 内閣府、文部科学省、厚生労働省『平成29年告示幼稚園教育要領保育所保育指針幼保連携型認定こども園教育・保育要領』2017年6月。
- ¹⁴ 森有正『旅の空の下で』筑摩書房、1969年。
- ¹⁵ ユージン・ジェンドリン、村瀬孝雄・池見陽・日笠摩子監訳『フォーカシング指向心理療法（上）』金剛出版、1998年
- ¹⁶ 齊藤英俊「小学校から高校時代におけるいじめ被害経験への対処行動といじめ被害経験からの成長感との関連性の検討」『教職課程研究』、3号、2017年、25-28頁。
- ¹⁷ 細澤仁「いじめを契機とする外傷後ストレス障害の力動的な心理療法」『心理臨床学研究』第22号、2004年、240-249頁。
- ¹⁸ 亀田秀子・相良順子「過去のいじめられ体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討」『カウンセリング研究』44号、2011年、277-287頁。

